

厚生労働科学研究費補助金
難治性疾患政策研究事業
分担研究報告書

家族性滲出性硝子体網膜症に関する調査研究

研究分担者 産業医科大学・医学部・教授 近藤 寛之
研究協力者 近畿大学・医学部・教授 日下 俊次
国立成育医療研究センター・眼科診療部長 仁科 幸子
大阪大学・大学院医学系研究科・寄附講座教授 川崎 良
山形大学・大学院医学系研究科・講師 金子 優

研究要旨：今年度より大規模医療データベースに基づく疫学的検討に着手した。乳幼児治療件数に関する経年推移を集計し報告した。

A. 研究目的

家族性滲出性硝子体網膜症（FEVR）は網膜血管の形成不全に起因する遺伝性疾患である。重症例では網膜剥離を合併し失明など重度の視機能障害をおこす。遺伝的な多様性があり、複数の原因遺伝子が報告されている。我が国では既往研究として横断研究による症例数把握が行われたが、大規模医療データベースを利用すれば経年推移等の縦断研究が実施可能である。本年度は大規模医療データベースを用い、乳幼児治療件数の経年推移を調査・推計した。

B. 研究方法

診断群分類研究支援機構が収集した診療群分類包括評価（DPC）データと、同機構へのデータの提供のない国立成育医療研究センターの治療件数を加えて、2歳以下の乳幼児を対象に2012～2019年度の8年間におけるFEVRの網膜凝固術と網膜硝子体手術の治療件数を集計した。

（倫理面への配慮）

診断群分類研究支援機構がデータ使用に関する倫理承認を受けている。

C. 研究結果

8年間のFEVR乳幼児治療件数は、年間約20～30件程度で推移しており、大きな変

動はなかった。網膜凝固術と手術の件数の比に一定の傾向は認められなかった。治療が実施された施設は地域的な偏りがみられた。

D. 考察

診断群分類研究支援機構が収集した DPC データは少数例（最小集計単位が 10 未満）の治療例に関しても集計可能である利点がある。一方、機構データは全ての DPC 参加病院を網羅していないため、機構データに含まれない施設が存在する可能性がある。また、対象とする病名コードの選択について課題があった。これらの課題を改善し、アンケート調査によるデータの補完を行えばより正確な症例把握が可能である。今後は対象年齢を拡大し、我が国での FEVR 症例の治療の実態の把握につとめる。

E. 結論

大規模医療データベースの利用による症例数の検討によって、FEVR の正確かつ詳細な診療状況を把握しうる。本研究は疾患の特性に基づく管理や治療に関するガイドラインの策定に寄与する。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

落合信寿, 日下俊次, 仁科幸子, 近藤寛之, 他. 家族性滲出性硝子体網膜症における乳幼児治療件数の経年推移. 第 127 回日本眼科学会総会 (2023/6-9, 東京

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし